

2003年度総合政策学部小論文(180分)

< 問題 >

以下にあげた二つの文章は、新渡戸稲造(1862～1933)と内村鑑三(1861～1930)のそれぞれの著作『武士道』(1900)と『代表的日本人』(旧版1894、決定版1904)の一部です。二つとも原文は英語で書かれています。

二冊の本が出版された当時 - それは明治維新から30年あまりがすぎた19世紀末でしたが - 日本はようやく近代化が軌道にのり、新興国家として国際社会で頭角を現しつつありました。日清戦争から日露戦争にいたる頃です。当時の世界秩序を主導していた欧米諸国の人々は、アジアに生まれた新しい近代国家である日本にたいして、好奇心と警戒感をもっていました。

新渡戸と内村は、欧米の読者に日本がいかなる国であるのかを理解してもらおうと、英語で日本の文化や歴史について説いたのです。二人の意図は実を結んで、彼らの著書は海外に多くの読者を獲得し、今日にいたるまで読まれ続けています。特に新渡戸の著書は、日露戦争の後、アメリカでベストセラーになりました。

現在、当時と比べて日本から世界各国へと発信される情報量は格段にふえました。けれどもまた、日本についての理解は深まったとはいえ面もあります。むしろ誤解がひろがっているといわざるをえないところもあります。はたして100年前に新渡戸や内村が語ったような熱意と説得力で、私たちは国際社会にたいして語りかけているのでしょうか。

そこで、今日は、現在の日本がいかなる国であるのか、歴史をふまえつつ、優れたところや悪いところ、問題点、これからの展望などについて、必ず具体的な事例(人物、事件、流行、都市、環境、経済、技術など)にそくして、外国の人に対して説明してもらいたいと思います。

新渡戸と内村は欧米の読者にむけて書きましたが、現在の世界では欧米の人だけに語ればよいというものではありません。今回はみなさんにまず語りかける相手の国の人々を選んでもらい、その相手国の事情も勘案したうえでその国の人たちに、日本について説明し、論じてもらいたいと思います。二人の文章をよく読んだうえで、みなさんなりの発想と語り口で、自由に書いてください。新渡戸と内村の文の要約や解説、引用はしないでください(冒頭に語りかけた国の名前を明記し1000字以内)。

そのうえで、別に、どうしてその国の人々にむけて書いたのか、どのような意図で、何を主眼として書いたのかを説明してください。(500字以内)

< 資料 >

武士道は甦るか

日本の変貌は今や全世界に明らかな事実である。このように重大な事業には様々な動機が自然に入りこんだ。しかし、その主要な力は何か、と問われれば、ためらうことなく、それは武士道であるといえることができる。

日本が外国貿易に全国を開放したとき、生活のあらゆる部分に最新の改良を輸入したとき、西洋の政治と学問を学び始めたとき、私たち日本人を動かした推進力はけっして物質資源の開発や富の増加ではなかった。ましてや西洋の習慣の模倣などではなかったのである。

東洋の制度や人民を詳しく観察したタウンゼンド^注 は書いている。

「私たちは日々ヨーロッパがいかに日本に影響を及ぼしたか、を教えられている。しかし日本の島々の中での変化はまったく自発的であったことを忘れていない。ヨーロッパ人が日本に教えたのではなく、日本みずからヨーロッパの文事・武備の制度や方法を学ん

だのだ。そしてそれが今までのところ立派に成功してきたことが実証されている。

トルコ人が何年も前にヨーロッパの砲術を輸入したように、日本はヨーロッパの機械工学を輸入した。これは正確に言えば、影響というべきものではない。例をあげるとすれば、イギリスが中国から茶を買い入れることで中国からなんらかの影響を受けたとはいえないのと同じである」と。

タウンゼンド氏は続けて、「日本を改造したヨーロッパの伝道師、哲学者、政治家、あるいは煽動者が一体どこにいるというのだ」という。

タウンゼンド氏は、日本に変化をもたらした活動のバネはまったく日本人自身の内であったことをよく見抜いていた。そして彼がなお日本人の心情をより深く探索していたら、洞察力の鋭いこの人は、このバネが武士道以外の何物でもないことを容易に確認しただろう。

劣等国と見なされることに耐えられない、という名誉心。これが動機の中で最大のものであった。殖産興業という考えは変革の過程で、後から目覚めたのである。

武士道の感化は、今なお、どんな人間にでも読みとれるほど明々白々である。日本人の生活を一瞥さえすれば、そのことはすぐにわかる。日本人の心をもっともはっきりと代弁し、かつ忠実に紹介したハーン^注を読んでみるとよい。彼が描く日本人の心情は武士道の作用の一例であることがよくわかるだろう。

国民全体の折り目正しさはまぎれもなく武士道の遺産である。このことはよく知られているのであらためてくりかえす必要はない。「小柄なジャップ」^注の身体がもっていた忍耐、不屈、勇気は日清戦争においてあますところなく証明された。「日本人以上に忠誠で愛国的な国民が存在するだろうか」とは、このとき、多くの人びとが考えた問いである。そしてその答は「否」である。私たち日本人は武士道に感謝しなければならない。

しかし、その反面、私たち日本人の欠点や短所もまた、武士道に責任があると認めざるを得ない。日本人が深遠な哲学を持ち合わせていないことは、武士道の訓育にあって、形而上学^注の訓練が重視されていなかったことにその原因を求めることができる。

幾人かの若い日本人が科学研究の領域において、すでに世界的な名声を博しているにもかかわらず、哲学の分野ではいまだに一人として一家を成した人は現れていない。

日本人の感じやすく、また激しやすい性質は私たちの名誉観にその責任がある。そして外国人がしばしばとがめるように、日本人は尊大なまでの自負心を持っている、というのであれば、これもまた名誉心の病的な行き過ぎによるものである。

日本を旅行した外国人読者は、蓬髪弊衣^注で、大きな杖あるいは本を抱え、世俗的な事柄にはまったくかわりがないという様子で大道を闊歩している若者をみたことがあるに違いない。

彼は「書生」である。彼にとっては地球はあまりに狭すぎる。天とてけっして高くはない。彼は宇宙と人生について、独自の理論を有している。彼はまた空中に漂う楼閣に身を置き、幽玄な知識の言葉を喰んで生きている。彼の眼中は大志の炎が輝き、その心は知識を求めてやまない。貧窮は彼の意欲をさらにおおる刺激にすぎず、彼の目から見ると、世俗的な財産は、彼の人格にとっては束縛とさえなるのである。彼は忠君愛国の権化である。彼はみずからに国家の榮譽の番人であるという役目を課している。

書生とは、その美点も欠点も、まさに武士道の最後の残滓でなくて何であろう。

武士道の影響は今なお深く根づき、かつ強力である。だが先に述べたように、その影響は必ずしも意識されたものではなく、無言の感化である。

日本人の心は、たとえその理由が明らかでないときでも、父祖から継承した観念に対する訴えには応答する。そのことは、たとえ同一の道徳観念であっても、新しき翻訳用語と、古い武士道の用語によって表現されたもの間には大きな開きがあることを意味している。

信仰の道から遠ざかっていくキリスト教徒がいた。そのとき牧師の説教は彼の墮落を救うことができなかった。しかしかつて彼が主にたいして誓った忠誠、すなわち忠義に訴えられると、彼は信仰の道に復帰せざるを得なかったのである。「忠義」という一語が、な

まぬるく、あいまいな状態に置かれていたすべての品性ある感情を復活させたのだ。

ある大学では、血気盛んな学生の一団が一教授に対する不満から長い間「学生ストライキ」をしていた。しかしそれは学長が提言した二つの単純明快な問いかけによってあっさり終息した。学長は「君たちの批判する教授は価値ある人物であるか。もしそうならば、君たちは先生を敬愛し、大学に留まってもらうべきではないか。その先生は弱い人であるか。もしそうならば倒れ伏している人を押しつぶすのは男らしくないではないか」と問うたのである。

ここではこの紛争の発端であった教授の学問的能力不足は、学長が提起した道徳上の問題とくらべると、重大な問題ではなくなっている。つまり武士道によってはぐくまれた感情を刺激することにより、偉大な道徳的革新が達成されたのである。

(『武士道』奈良本辰也訳 三笠書房より)

注

ウンゼンド メレディス・タウンゼンド『アジアとヨーロッパ』の著者
 ハーン ラフカディオ・ハーン ギリシアに生まれアメリカで記者に。来日後、帰化し小泉八雲として『怪談』『霊の日本』などを執筆
 ジャップ英語での日本人に対する蔑称
 形而上学 眼に見える現象を越えて、その背後に在る本質、根本原理、などを探究しようとする学問
 蓬髪弊衣 髪を伸びて乱れるにまかせ、着物も破れている様

新渡戸稲造(1862～1933) 教育家、農政学者。岩手県盛岡市に生まれる。東京英語学校をへて、1881年札幌農学校卒業。同農学校在学中、内村鑑三らとともに、キリスト者となる。84年アメリカに留学。その後農政学研究のためドイツに留学をした。1901年台湾総督府技師として、殖産事業にたずさわる。1906年第一高等学校校長、1909年より東京帝国大学教授として植民政策を講義した。

第一次世界大戦後、国際連盟の発足にともない、国際連盟事務次長(1920～26)、また太平洋問題調査会理事長(1929～33)として、「太平洋の橋たらん」という志により活躍した。



二宮尊徳^注 一農民聖者

1 今世紀初頭の日本農業

「農業は国家存立の大本である」とは、まさにわが国のことであります。海運や商業上の利便に恵まれているとはいえ、人々の生活は主として土に頼っているからであります。ただ自然の産出力によるだけでは、15万平方マイル^注のうち、わずかに二割しか耕作できるところのない限られた国土で、4800万人もの巨大な人口を養っていくことはできません。土地は最大限の生産が可能ないように利用されなければならず、そのためには、人間の才能と勤勉とを精一杯用いる必要があります。

日本の農業は、世界でもっとも注目すべき農業であると考えます。土の塊の一つ一つがていねいに扱われ、土から生ずる芽の一つ一つが、親の愛情に近い配慮と世話とを与えられます。私どもに欠けていた科学を、たゆまぬ勤勉でおぎない、こうして菜園ともいえるような、きめ細かく整然とした1300万エーカー^注の耕地を所有しているのです。

このような高度の農耕は、人々のなみなみならぬ努力により、はじめて可能になります。少しでも怠れば、実にみじめな荒地に確実に化してしまうのです。一度は耕作されていた土地が、人手から放置されているのを見るのは、まことに心を痛めます。そこには原始林の有する活力も繁茂力もありません。見捨てられた荒地は、暗い絶望的な感じます。処女地の開墾にいともうとする人が10人いたとしましょう。そのうち見捨てられた土地の再興に捧げようと志す人は、一人もいないのです。俟約で働き好きな世界諸国の人々が、すべて引き寄せられるのはアメリカ大陸であります。他方では、バビロン^注はフクロウとサソリの巣のままに残されているのです。

19世紀のはじめ、日本農業は、実に悲惨な状態にありました。200年の長期にわたってつづいた泰平の世は、あらゆる階層を問わず人々の間に贅沢と散財の風をもたらしました。怠惰な心が生じ、その直接の被害を受けたのは耕地ではありません。多くの地方で土地からあがる収入は三分の二に減りました。かつて実り豊かであった土地には、アザミとイバラがはびこりました。耕地として残された、わずかな土地でもって、課せられた税のすべてをまかなわなければなりません。どの村にもひどい荒廃が見られるようになりました。正直に働くことのわずらわしくなった人々は、身を持ち崩すようになりました。慈愛に富む大地に豊かな恵みを求めようとはしなくなりました。代わって、望みない生活を維持するため、相互にごまかしあい、だましあって、わずかの必需品をえようとなりました。諸悪の根源はすべて道徳にありました。「自然」は、その恥ずべき子供たちには報酬を与えず、ありとあらゆる災害を引き起こして、地におよぼしました。そのとき、「自然」の法と精神を同じくする、一人の人物が生まれたのです。

2 少年時代

尊徳(徳を尊ぶ人)ともいわれる二宮金次郎は、天明7(1787)年に生まれました。父は相模の国の名もない村の、ごく貧しい農夫でしたが、近隣の人々には情け深いことと公共心の厚いことで知られていました。16歳のとき、尊徳と二人の弟は親を亡くしました。親族会議の結果、あわれにも一家はひき離されて、長男の尊徳は、父方の伯父の世話を受けることになりました。伯父の家であって、この若者は、できるだけ伯父の厄介になるまいとして、懸命に働きました。尊徳は一人前の大人の仕事のできないことを嘆き、若年のために日中に成し遂げられなかった仕事を、いつも真夜中遅くまでつづけて仕上げました。そのころ尊徳の心には、古人の学問に対して「目明き見えず」、すなわち字の読めない人間にはなりたくないとの思いが起こりました。そこで孔子の『大学』を一冊入手、一日の全仕事を終えたあとの深夜に、その古典の勉強に熱心につとめました。ところが、やがて、その勉強は伯父に見つかりました。伯父は、自分にはなんの役にも立たず、若者自身にも実際に役立つとは思われない勉強のために、貴重な灯油を使うとはなにごとか、とこっぴどく叱りました。尊徳は、伯父の怒るのはもっともと考えて、自分の油で明かりを燃やせるようになるまで、勉強をあきらめました。

こうして翌春、尊徳は、川岸のわずかな土地を開墾して、アブラナの種を撒き、休日をあげて自分の作物の栽培にいそしみました。一年が過ぎ、大きな袋一杯の菜種を手に入れました。自分の手で得た収穫であります。誠実な労働の報酬として「自然」から授かったものであります。尊徳は、この菜種を近くの油屋へ持参し、油数升と交換しました。尊徳は今や、伯父のものによることなく、勉強を再開できると考え、言いようのない嬉しさを感じていました。

勇んで尊徳は夜の勉強を再開しました。自分の、このような忍耐と勤勉とに対し、伯父からは、ほめ言葉があるのではないかと、少しは期待した面もありました。しかし、違った! 伯父はおれが面倒を見てやっているのだから、おまえの時間はおれのものだ、おまえたちを讀書のような無駄なことに従わせる余裕はない、と言いました。尊徳は、今度も伯父の言うことは当然だと思いました。言い付けにしたがって、一日の田畑の重い労働が終わったあとも、むしろ織りやわらじ作りにはげみました。それ以降、尊徳の勉強は、伯父

の家のために、毎日、干し草や薪を取りに山に行く往復の道でなされました。

休みの日は自分のものであっても、遊んで過ごしてしまうことはありませんでした。アブラナの経験は、尊徳に熱心に働くことの価値を教えました。尊徳は、もっと大規模に同じ経験を試みようと思いましたが、最近の洪水により沼地に化したところを村のなかで見つけました。そこは、自分の休みを有益な目的に使える絶好な場になると思いました。沼から水をくみ出し、底をならし、こぢんまりとした田圃になるようにしました。その田に、いつも農民から捨てられている余った苗を拾ってきて植え、夏中怠らず世話をしました。秋には二俵もの見事な米が実りました。一人の孤児が、つつましい努力の報酬として、人生ではじめて生活の糧をえた喜びのほどは、容易に想像されます。この秋、尊徳がえた米は、その後の波乱に富んだ生涯の開始にあたり、その資金になりました。尊徳は真の独立人であったのです！「自然」は、正直に努める者の味方であることを学びました。尊徳の、その後の改革に対する考えはすべて、「自然」は、その法にしたがうものには豊かに報いる、という簡単なことわりに基づいていたのであります。

数年後、尊徳は伯父の家を去りました。自分で見つけて改良した村のなかの不用な荒地から、みずからの手で収穫したわずかの米をたずさえて、今や、多年住む人のなかった両親の家に戻りました。尊徳が、忍耐と信念と勤勉とにより、混乱を整え、荒地を沃地に変えようとする試みを妨げるものはなにもありませんでした。山の斜面、川岸、道端、沼地などの不毛な土地はことごとく、尊徳には富と生活の糧を与えるものとなりました。何年もたたないうちに、尊徳はかなりの資産を有するようになり、近所の人々すべてから、模範的な倹約家、勤勉家として仰がれる人物になりました。尊徳は、なにごととも自力で克服しました。また他人が自力で克服する手助けは、常にいとわず致しました。

(『代表的日本人』鈴木範久訳 岩波文庫より)

注

宮尊徳(1787～1856)江戸末期の篤農家。通称、金次郎。徹底した実践主義で、600余りの町村を復興した。

マイル ヤード - ポンド法による距離の単位。約1.6キロメートル。

エーカー ヤード - ポンド法の面積の単位。約40アールに等しい。

バビロン イラク中部にあった、メソポタミアの古代都市。旧約聖書イザヤ書などでは、神により滅ぼされバビロンの情景として「フクロウとサソリの巣」という表現が使われている。

内村鑑三(1861～1930) 明治・大正期の基督教の代表的指導者、伝道者。高崎藩士の子として江戸に生まれ、1877年札幌農学校に第二期生として入学。1884年渡米。知的障害児施設で看護人として働く。1885年アマースト大学に入学し、信仰にたいする確信をえる。

1888年5月に帰国後、ミッションスクールの教頭になるが、宣教師と対立して辞任。1891年第一高等中学校での教育勅語捧読式での、いわゆる「不敬事件」により辞職。1897年から『萬朝報(よろずちょうほう)』の英文欄主筆となり、自ら創刊した『東京独立雑誌』などで、痛烈な社会批判、文明批評に筆をふるう。

1903年日露開戦をめぐり非戦論を主張し、幸徳秋水らとともに万朝報を退社。無教会主義基督教の主張者として基督教界に大きな影響をあたえるとともに、日本の宗教、教育、思想、文学、社会その他多方面に広く深い影響をおよぼした。

